

## 入選

### 笑顔をつなぐ

山口県 由宇小学校 6年 齊藤 虹心

「疲れた……、暑い……。」

外にいただけで、息が苦しくなるくらいの日、母と弟と三人で東京の親せきのおばさんの家に遊びに行きました。

私の住んでいるところでは、ふだん車ばかり使っていて、電車に乗ってもあたりまえのように席はあいて座ることができます。

東京の町を歩いて疲れた私たちは、電車に乗ったときに空いていた「優先座席」に座りました。

しばらくすると、おばあちゃんと3才くらいの女の子、赤ちゃんを抱っこしたお母さんが乗ってきました。

母は、「こちらに座ってください。」と声をかけると、そのお母さんは、

「この子は立って抱っこをしていないと泣いてしまうんですよ。ありがとうございます。」と言いました。

そのうち、小さかった私の弟も寝てしまったので、母もいっしょに座っていました。すると、次の駅で乗ってきた女の人が私たちに、

「あなたたちがそこに座っているから、立っている人たちが座れないでしょう。」

と言いました。母は謝りながらキャリーケースを私に預けて、弟を抱いたまま立ちました。でも、せっかく空いた席にはだれも座りません。

そのうちのどがかわいたので、おばさんが持たせてくれた水筒のお茶を飲んでいると、さっきの女の子が私を見て、「のどがかわいた」と泣きだしてしまいました。

お母さんは赤ちゃんを抱いているし、おばあちゃんは一生涯懸命女の子を静かにさせようとなだめていました。私は、まだたくさんあるペットボトルのお茶を、一本女の子に持って行って「どうぞ」と言いました。すると、

「あなたのがなくなるから大丈夫よ。」とおばあちゃんがやさしく言いました。私は、

「おばあちゃんがたくさんお茶を入れてくれたから重くて困っていたんです。一本どうぞ。」

と言うと、女の子は涙でぬれた目で私を見ながら、「ありがとう。」と言ってニコニコしながら、次の駅で降りていきました。

私は、この15駅の間で出会った人たちを思い出しながら、「親切」って何だろうと思い、調べてみると、「相手の身になってその人のために何かをすること」とありました。昔は、「深切」や「心切」という漢字も使われていたと知り、こちらの方がわかりやすいなと感じました。

もう会うことはないであろう人たちの乗った小さな空間で、どんな人なのかもわからず、感じ方や受け止め方も一人ひとり違います。

ただ、「笑顔」が返ってくることは私にとっては、「感謝状」をもらえたような温かい気持ちになれること。それが相手の気持ちと歯車が合ったような感覚なのかなと思いました。

これから私の生きる道も長く続いていきますが、人を選ばず一つ一つの駅に私たちを運んでくれる電車のように、私も笑顔をつなげる大切な行動が自然にできる人間になりたいです。